

1 「海と生きる探究活動」の主題について

研究主題・副題を「自ら課題を見だし、身に付けた知識を活用して解決しようとする児童の育成～海と生きる探究活動における探究的な学びの充実を通して～」とし、「海と生きる探究活動」の校内研修に取り組んできた。今年度も、地域の漁業従事者や生産者等との交流や体験の機会を活用し、生きて働く「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」や学びを自分の生き方や日常に生かそうとする「学びに向かう力・人間間性等の涵養」を育成することを目指し、校内研究5年計画の5年目を迎えた。目指す児童像の具現化を図り、主体的（自分事として捉える）・対話的（共に学び合う）・深い学び（探究的に学ぶ）を重視し、自身が課題を見付け、問題意識を持つことで、自分自身の学びを深めていく学習を「唐桑小学校の海と生きる探究活動」と捉えた。今後も児童の探究活動が充実したものとなるよう職員が協働で本研究を進め、学校教育目標の具現に努めたい。

2 「海と生きる探究活動」の視点の内容や視点に沿った実践は推奨されたか。

研究5年計画の5年目の集大成の研究となることから、年度始めに、全職員で研究の視点に沿って実践研究を進めていくこと、振り返りの観点を明確にし、次の学びへとつながる振り返りを全学年で行っていくことの共通理解を図った。

探究活動を基盤に、「伝える」「広げる」「行動につなげる」学びをより体系化し、中学年から上学年へと学年を通した持続的・発展的な探究活動として構成してきた。ふるさと唐桑の自然・文化・産業・人を探究の対象とし、地域との関わりの中で課題を自分事として捉え、よりよい地域や社会の在り方を考え、実践へとつなげる力の育成を目指した。

3年生では、地域の「宝」を発見・比較し、価値付ける活動を通して唐桑への関心と愛着を高める活動となっていた。4年生では、海に関わる伝統芸能や水産業を題材に、地域の営みと自然とのつながりを理解し、持続性の視点を育成することができた。5年生では、漁業協同組合等と連携し、磯焼け対策としての藻場再生をテーマに、課題解決型の探究を行うとともに、他校との交流を通して視野を広げた。6年生では、3年間の学びを統合し、ふるさと唐桑地域・気仙沼市の未来像を描きながら、自ら企画・実践する活動へと発展させることができた。海洋リテラシーについて常に子供たちに意識させて取組ができた。昨年度の課題を受け、次の学びにつながるような振り返りを全学年で観点を明確にして共通理解を図って取り組めた。

また、地域支援員との意見交換を通して活動を振り返ることで双方向の関わりを通じて学びを高めることができたと捉える。

3 「海と生きる探究活動」の組織と活動内容について

校内研究として5年計画の5年目として実践してきた。年度当初に初任層や初めて「海と生きる探究活動」に携わる担任へ、これまでの研究成果と課題について共通理解を図る時間を設定し、共通理解を図って探究活動を進めた。また、地域の方々や学校支援員との事前の連絡調整はもちろん、企業等への外部講師依頼や授業の準備、実地踏査や実施計画作成に、担任外や海洋教育担当が協働で取り組む体制を整え実践した。

4 「海と生きる探究活動」実践に対する自己評価について

「海と生きる探究活動」を3年間実践してきた6年生児童は、これまでの学びを統合し、ふるさと唐桑のよさや魅力をさらに高めるために、「課題点を解決する」か「地域の人々の願いを実現する」のどちらかの視点で考え「ふるさと唐桑のより良いまちづくり」に重点を置いて取り組んできた。「海と生きる町をつくる」といった大きな視点に立って、唐桑町の町の様子、漁業、自然景観の魅力やよさについて考えるだけでなく、漁業従事者、人口の減少、空き家問題など実際に地域を散策し、地域の方々の声を聞き考えたふるさと唐桑が抱える課題点から、持続可能な唐桑のまちづくりへと考えを広げ、「リアスサミット in 唐桑」において問題提起とともに、自分たちが考える解決策について提案することができた。まさに、「a 海と出会い、なかよくなる、b 海の恵みを知る、c 海の仕組みを知る、d 海を生かす、e 海と生きる文化を重ね、伝える、f 海と生きるまちをつくる」という海洋リテラシーの理念を意識した授業づくりの成果が表れたと考える。

次年度は、海洋教育特例校としての5年間指定研究は終了となるが、今後も3年生以上の「海と生きる探究活動」は継続して取り組んでいく予定である。「海探デザインシート」や「年間指導計画」の見直し、改善、修正を行いつつ海を中心とした地域の自然や人々に親しみながら学びを自分の人生や日常に生かそうとする力を育んでいくこととしたい。